

愚かさを繰り返した夫婦

〔聖書〕創世記 16 章 1～16 節

アブラムの妻サライには、子供が生まれなかった。彼女には、ハガルという エジプト人の女奴隷がいた。サライはアブラムに言った。「主はわたしに子供 を授けてくださいません。どうぞ、わたしの女奴隷のところに入ってください。わたしは彼女によって、子供を与えられるかもしれません。」アブラムは、サライの願いを聞き入れた。アブラムの妻サライは、エジプト人の女奴隷ハガルを 連れて来て、夫アブラムの側女とした。アブラムがカナン地方に住んでから、 十年後のことであった。アブラムはハガルのところに入り、彼女は身ごもった。ところが、自分が身ごもったのを知ると、彼女は女主人を軽んじた。サライはアブラムに言った。「わたしが不当な目に遭ったのは、あなたのせい です。女奴隷をあなたのふところと与えたのはわたしなのに、彼女は自分が身 ごとったのを知ると、わたしを軽んじるようになりました。主がわたしとあなたとの間を裁かれますように。」アブラムはサライに答えた。「あなたの女奴隷はあなたのものだ。好きなようにするがいい。」サライは彼女につらく当たった ので、彼女はサライのもとから逃げた。 主の御使いが荒れ野の泉のほとり、シュル街道に沿う泉のほとりで彼女と出 会って、言った。「サライの女奴隷ハガルよ。あなたはどこから来て、どこへ 行こうとしているのか。」「女主人サライのもとから逃げているところです」と 答えると、主の御使いは言った。「女主人のもとに帰り、従順に仕えなさい。」主 の御使いは更に言った。「わたしは、あなたの子孫を数えきれないほど多く増や す。」主の御使いはまた言った。「今、あなたは身ごもっている。やがてあなたは男の子を産む。その子をイシュマエルと名付けなさい／主があなたの悩みを お聞きになられたから。彼は野生のろばのような人になる。彼があらゆる人に こぶしを振りかざすので／人々は皆、彼にこぶしを振るう。彼は兄弟すべてに敵対して暮らす。」 ハガルは自分に語りかけた主の御名を呼んで、「あなたこそエル・ロイ（わたしを顧みられる神）です」と言った。それは、彼女が、「神がわたしを顧みられ た後もなお、わたしはここで見続けていたではないか」と言ったからである。 そ こで、その井戸は、ベエル・ラハイ・ロイと呼ばれるようになった。それはカ デシュとベレドの間にある。ハガルはアブラムとの間に男の子を産んだ。アブラムは、ハガルが産んだ男の子をイシュマエルと名付けた。 ハガルがイシュマ エルを産んだとき、アブラムは八十六歳であった。

〔序〕 アブラハムの妻サラ

私たちは聖書教育の教案に沿って、信仰の父といわれるアブラハムについて 7月6日から6回にわたって学んでいます。第 4 回目の今日は、アブラハムの妻サラにスポットを当てて、メッセージを汲みとることにいたします。彼女もサライという名でしたが、89 才の時に、アブラハムの子を産むとの約束と共に、サラという名を神さまからいただいたのでした。この時アブラムもアブラハムという名を神さまから頂いています(17 章)。

アブラハムが神さまの召しを聞いてハランを出発した時、10 才年下のサラは 65 才でした。約束の地カナン地方でアブラハムと寄留生活の苦楽を共にして 127 才で死にました。アブラハムは胸を打ち、嘆き悲しみ、その地へブロンに彼女を 埋葬するために、大金を投じて墓地を買いました。この墓地こそアブラハムが 約束の地カナンで所有することになった初めての土地なのです。ハランを出立して何と 62 年後のことでした(23 章)。

〔1〕 神の守り

サラは大変美人だったようです。それ故に恐ろしい経験を二度も繰り返しました。第一回目はカナンに到着して程なく、ひどい飢饉に見舞われ、水の豊かな エジプトへ避難した時のことです。ア

ブラハムはサラが妻だと知ればエジプト王は彼を殺してサラを召上げるのではないかと恐れました。そこでサラを妹だということにしました。事実、サラはアブラハムとは母違いの兄妹の間柄でした。当時は父が同じでも、産む母が違えば結婚してもよかったようですから、嘘ではないのです。案の定サラは王宮に召し入れられましたが、神さまは王宮に病気を広めて王に気付かせ、救い出して下さいました。その上エジプト王はサラを召上げた時に、羊、牛、ロバ、らくだや、その世話をする奴隷をアブラハムに与えましたから、彼はサラのお蔭で財産を大いに増やしたことになったのです。

第二回目はペリシテ地方に寄留していた時にゲラルの王がサラを召上げたのです。この時も神さまが、王に夢の中でサラがアブラハムの妹ではなく、妻だと告げて下さったので、助けられました。そして羊や牛、世話をする奴隷、また 銀 1000 シェケルを贈られました。これは 21 章のサラがイサクを出産する記事の直前 20 章に記されています。イサク誕生がサラ90才の時だとしますと89才でイサクを身ごもる時より、少し以前だったこととなります。

でも今日の分級で学んだ「イサク誕生の予告」が 18 章です。その時神さまがアブラハムとサラに「来年の今頃、サラに男の子が生まれているでしょう」とお告げになりますと、サラはひそかに笑っています。自分も主人も十分に年老いているのにと思ったからです。それでも「主に不可能なことはない」と宣言なさる神さまは、この十分に年老いたアブラハムとサラ夫婦に、待望の跡継ぎ息子を出産させる奇跡を行われたのでした。

それはとりもなおさず、老いたりとはいえ、サラには女性としての力と魅力、美しさが未だ衰えずに備わっていたことをも意味しているのではないのでしょうか。パレスチナとイスラエルが殺し合う紛争のニュースが毎日 TV で報道されています。女性たちは皆長いスカーフやベールで身を包んでいます。イスラム教徒だからでしょうか、砂漠や荒地で暮す遊牧民の女性も皆、厳しい自然から身を守るために、肌を包む衣装を着ているのです。だからサラも老いてもなおゲラルの王を魅了する優雅さをただよわせていたのではないのでしょうか。

[2] サラとアブラハムの迷いと過ち

今日の 16 章の記事はアブラハムがカナンの地方に住んでから 10 年後のことです(16:3)。アブラハムは 85 才、サラは 75 才になっていました。依然として子どもを宿す気配は起こりません。自分の老いを痛感したサラは遂に決心して、社会の通例に従い、側女によってアブラハムの子を得ることにしたのです。

「主はわたしに子供を授けてくださいません。どうぞ、わたしの女奴隷のところにいらっしゃい。わたしは彼女によって、子供を与えられるかもしれません」。神さまは 15 章でアブラムに「あなたから生まれる者が跡を継ぐ」と約束されましたが、正妻のサラが生む嫡子とは特におっしゃっていません。そこでアブラハムもサラの提案を聞き入れることにしました。しかしこれは、神さまの御心ではなかったのです。

たちまち家庭にトラブルが生じました。ハガルが身ごもると、主人のサラに対して、態度が尊大になり始めたのです。サラはハガルの態度に我慢ならなくなり、アブラハムを責め立てました。アブラハムは身近な二人の確執に、「あなたは彼女の主人なのだから、気の済むようにするがよい」と逃げの一手。サラがハガルにつらく当り始めたので、彼女はとうとう逃げ出しました。

故郷のエジプトを目指して国境いの荒れ野にある泉のほとりまで来た時のことです。主の御使い（神さまご自身）がハガルに現れて声をかけられました。「サラの女奴隷 ハガルよ。あなたはどこから来て、どこへ行こうとしているのか」。「女主人サラのもとから 逃げているところです」。「どこへ」の答えがありません。やみくもに逃げ出して、気が付いたら故郷のエジプトへの街道を歩いていた。途方にくれているハガルの姿が浮かんできます。

「主人のもとに帰り、従順に仕えなさい」と神さまはお命じになりました。ハガルは逃げ出してきた恐ろしいサラの下に戻って行きました。どうしてでしょうか。神さまが「あなたの子孫を数えきれないほど多く増やす」と約束してくださったからです。「神さまは私の悩みをお聞き下さっている」。この確信を得て希望が与えられました。そしてどんな 辛さにも耐えようという勇気が湧いて来たのです。ハガルは神さまと出合った泉を「エル・ロイ」（私を顧みられる神）と名付けました。神さまに顧みられている限り、私たちは辛さに耐えて生き抜いていくことができるのですね。

しかし皆さん、ハガルの産む子イシュマエルの将来に対する神さまの言葉にご注目下さい。「彼は野生のろばのような人になる」。「兄弟すべてに敵対して暮らす」。粗野で周囲の者と争いの絶えない生涯を送るとは、祝福された人生とは言えないのではないのでしょうか。でもサラにいじめられて苦しんでいたハガルは、男なんだから荒々しくても、たくましく生き抜いてくれる子供ならそれでよし、と受け取ったのでしょう。

それにしても同じアブラハムの子でありながら、後から生まれたイサクと比べて、神さまはイシュマエルに対しては、随分質の落ちた生涯をお約束なさったものです。私はここに神の約束の子と自分たちが勝手に生もうとした子とを、はっきりと区別なさった神さまの厳しいご意志を見る思いがします。

先週学んだ 15 章を思い返して下さい。アブラハムは天を仰いで、約束を待ち続ける信仰を新にさせられたはずですが。もしもアブラハムに、自分とサラとが一体になっている夫婦なのだという自覚があれば、「あなたから生まれる者が跡を継ぐ」と言われた「あなた」とは、自分とサラを意味しているという御心が分かったはずですが。そして神さまからこの約束をいただいているのだと信じて、二人一緒に固く立つべきだったのです。ここに、夫婦は一体であるという自覚が、アブラハムにもサラにも薄かったと言わ ざるをえません。

[3] 母なるが故の罪深さ

イシュマエルが誕生して 14 年後に、90 才のサラは待望の子イサク(笑う)を出産しました。サラは心

から喜び、歌いました。「神はわたしに笑いをお与えになった。聞く者は皆、わたしと笑い(イサク)を／共にしてくれるでしょう。」「誰がアブラハムに言いたで しょう／サラは子に乳を含ませるだろうと。しかしわたしは子を産みました／年老いた夫 のために。」跡継ぎを生むのが妻の第一の役割りと決めつける社会通念のもとで、サラはどれほど肩身の狭い思いで長い年月を過してきたことでしょうか。苦しみから解放された大きな喜びが伝わってきます。

イサクは丈夫に育ち始めました。このまま健やかに成長してくれるでしょう。3～4才 位になった頃でしょうか。イサクとたわむれるイシマエルを見て、イシマエルが我が子の将来の妨げになる不安を募らせたサラは、アブラハムに訴えました。「あの女のあの子を追い出してください。あの女の息子は、わたしの子イサクと同じ跡継ぎとなるべきではありません」。このことはアブラハムを非常に苦しめました。イシマエルも自分の子 だからです(21:11)。

しかし神さまは彼に言われました。「あの子供とあの女のことで苦しまなくてもよい。すべてサラが言うことに聞き従いなさい。あなたの子孫はイサクによって伝えられる。しかし、あの女の息子も一つの国民の父とする。彼もあなたの子であるからだ」。

アブラハムは、次の朝早く起き、パンと水の革袋を取ってハガルに与え、背中に負わせて子供を連れ去らせました。ハガル親子はベエル・シェバの荒れ野をさまよい、革袋の水が無くなると、彼女は子供を一本の灌木の下に寝かせ、「わたしは子供が死ぬのを見るのは忍びない」と言って、矢の届くほど離れ、子供の方を向いて座り込み、声をあげて泣きました。

神さまはその泣き声を聞かれ、天から御使いがハガルに呼びかけて言いました。「ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。神はあそこにいる子供の泣き声を聞かれた。立って行って、あの子を抱き上げ、お前の腕でしっかり抱き締めてやりなさい。わたしは、必ずあの子を大きな国民とする」。神さまがハガルの目を開かれたので、彼女は水のある井戸を見つけました。彼女は行って革袋に水を満たし、子供に飲ませました。こうしてイシマエルも神さまの守りの中で荒れ野に住み、弓を射る者となりました。

サラは何という手前勝手に酷い仕打ちをハガル親子にしたのでしょうか。このようなサラとサラに振り回されるアブラハムの姿を読みますと、アブラハムとサラ夫婦の罪深さと、それにもかかわらず、この二人の罪に痛めつけられた者に救いの手を差し伸べてくださりながら、なおアブラハムとサラを育て、導き、用いておられる神さまの大きな御心を知らされます。

[結] 神に選ばれた者の幸せ

先週の 15 章の説教で山下先生が指摘されたように、神さまがアブラハムと結んで下さった契約は、二つに切り裂かれた動物の間を、神さまの煙と火が通り過ぎただけで、アブラハムは何もしていない一方的な締結でした。契約は当事者双方が対等に守る 義務がありますから、一方が破れば契約は廃棄になります。しかし神さまがアブラハムと結んで下さった契約は一方的なものでした

から、アブラハムの態度が崩れようとも、神さまは変りなく守って下さる契約なのですね。どうして神さまはアブラハムをそのように特別扱いされたのでしょうか。

それは、神さまがアブラハムをすべての民の祝福の源にお選びになったからにほかなりません。何故神さまは彼をお選びになったのか。彼は決して聖人ではありませんでした。妻のサラと一緒にあって愚かな罪を繰り返しています。でも彼は神さまの呼びかけに応えて、生まれ故郷、父の家を離れて、神さまが行けと言われる地に向かって歩み始めたのでした。サラもそのアブラハムと共に歩み始めたのです。そこで神さまは、彼らのしでかす罪を償いつつ、この二人を祝福の源になるように導いて下さったのでした。

神さまの選び。これはアブラハムとサラ夫婦だけに限りません。新約聖書にも「あなたがたは、選ばれた民、聖なる国民、神のものとなった民です」(Iペトロ2:9)という言葉があります。私たちはそれぞれ選ばれた民の一人なのです。何か特別な優秀さのゆえではありません。ただ神さまが私を恵み深く選んで、声をかけて召し出して下さったからです。十字架にかかって私の罪をご自分の血で清め、罪の滅びから救い出して下さったお方が、私に従いなさいと呼びかけて下さいました。その声を、私が聞き取り、「はい」と答えて従い始めた者でしかありません。

大切なのは、信仰の従順さです。主の言葉を聞き取ろうと真剣に求め、主に全幅の信頼を寄せて、一歩また一歩とお従いして行くことです。愚かさや迷いにつまずきながらでも、神さまに用いていただこうとしていくことです。その生き方を、サラの生涯から学び取りたいものです。

完